

JUNKAN

2015 MAY

循環研通信 No. 40

2014 循環研セミナー

「アブダビ首長国 サステナビリティ・ウィーク報告」

講師：榎屋 治紀 氏（システム技術研究所所長）

アブダビ首長国はアラビア湾（ペルシャ湾）に接し、アラビア半島の北部に位置する UAE（アラブ首長国連邦）の 7 つの首長国の一つである。アブダビの人口 197 万人（市内）、GDP は 10 兆円、経済の石油依存率 60%。これに対して、ドバイは人口 210 万人（市内）、GDP は 8 兆円、石油依存率 40% である。

アラブ首長国連邦の中のアブダビ首長国は面積では最大の首長国である。1958 年の石油発見後、急速に都市国家となった。ドバイ首長国はアブダビの 100 km 北東にあり、真珠の養殖で栄えたが、日本の人工養殖成功後に没落した。1961 年の海底油田発見により再び栄え、金融+リゾート国家として繁栄するに至っている。2008 年のリーマンショックで打撃を受けたが現在は立ち直っている。

アブダビ首長ザイド・ビン・スルターン・アール・ナヒヤーン（1918-2004）は、1971 年、アブダビを含め 7 つの首長国からなるアラブ首長国連邦（UAE）を統一し、初代大統領となり、2004 年の死去までその職にあった。「アブダビは産油国であるが、いつまでも石油に依存できない。アブダビは未来のエネルギーの主要国になる」という彼の言葉が、毎年開催されるサステナビリティ・ウィークと「ザイド未来エネルギー賞」の創設のもとになっている。

サステナビリティ・ウィークは、毎年、アブダビ

国際展示場で、世界の未来エネルギーに関する国際会議と展示会を開催している。「世界エネルギーサミット」の開会式の様子を写真 1 に示している。未来エネルギーとは再生可能エネルギーを意味している。IRENA（国際再生可能エネルギー機関）の本部をアブダビに招致し、そのヘッドクォーターをマスターシティに建設中である。

国際展示場の展示会には、多くの製品が出品されている。そのなかにイタリアの SOLERGY 社の集光型太陽光発電システムがあった。追尾式でガラス製の円錐型ユニット（直径およそ 30 cm）に取り付けたレンズで集光し、3 重接合セルの発電効率は 32% という。集光部から 85℃ 以上の熱を取り出し温水などに供給するコージェネで総合利用効率は 70% 以上になる。また、イタリアの GP III SOLAR 社のミラー反射式の追尾式集光型の太陽光発電があった。一つの正方形ユニット（26 cm 角）にある放物面ミラーで反射して集光する。水平方向の 8 ケのユニットが同時に太陽高度に応じて傾斜し、構造全体が太陽の向きに合わせて回転追尾する。コストは 15~16 千ユーロ/kW という。この価格なら経済性がありそうだ。日本からの出品としては日本写真印刷の色素増感型太陽光電池、パナソニックのソーラーカーなどがあった。しかし、多くはイタリア、フランスなどヨーロッパ企業のものであった。米国からの出品は少なかった。



写真1 未来エネルギーサミットの開会式

ザイド未来エネルギー賞の受賞式が行われた。その2014年の受賞者（○印）とファイナリストは以下のとおり。

大企業部門（賞金なし）：○ABB（エンジニアリング会社、スイス）、GE（米国）、Walmart（米国）

中小企業部門（賞金150万ドル）：○Abellon Clean Energy（インド）、Power Finance, EcoNation, SELCO India

NGO 部門（賞金150万ドル）：○フラウンホーファー研究所（独）、Practical Action（旧・中間技術開発グループ、英国）、世界資源研究所（ワシントンのシンクタンク、米国）

グローバルハイスクール部門（賞金は各10万ドルづつ）：米国、欧州、アフリカ、アジア、オセアニアの各地域から各ひとつの高校が選出された。

生涯貢献賞（賞金は50万ドル）：王伝福氏（中国の総裁、電気自動車の開発）

選考委員会のメンバーには、アイスランド大統領グリムソン氏（委員長）、バージン航空会長リチャード・ブランソン氏の名前が見える。

マスダールシテイは、国際展示場から7km 離れ

たところであり、マサチューセッツ工科大学（MIT）の協力で計画を立案し建設を進めているプロジェクトである。太陽光・風力エネルギーを利用するサステナブル都市であり、最終的には居住人口4万人、さらに5万人が通勤通学する規模になる。そのなかにはマスダール研究所、IRENA（国際再生可能エネルギー協会）の本部、シーメンス中東、ゼネラルエレクトリック、三菱重工、グローバル・グリーン成長研究所などのオフィスが入居する予定ということであった。

写真2の右の建物が建築中で、内部を見学できる。ここがマスダールシテイの中核施設となり、住宅やオフィスになる予定。右奥には太陽光発電プラントが見える。4人乗りの自動走行の無人走行電気自動車PRT（パーソナル・ラピッド・トランジット）が、建物の地下を走行している。



写真2 マスダールシテイ（模型）

マスダールシテイの建物はパッシブソーラーであり、一般的な建物と比較してエネルギー消費を56%削減、水の消費を54%削減する。屋根に設置した太陽光発電はマスダールシテイのベースロード電力の30%を供給する。中央の広場には45mの高さの「風の塔」があり、上部の冷たい風を下部へ導き広場を涼しくする。この地域に古くからある伝統的な工夫の一つであるという。また建物の外ではグリッドに接続する10MWの太陽光発電を行っている。

最後に観光というわけではないがアブダビ市内を

見物した。故シェイク・ザイード UAE 大統領を記念して 2007 年に建設された白亜の巨大なモスクが一般に開放されていて、多くの人々が訪れている。祈りをささげるホールにある世界一巨大な手織りの絨毯が有名ということであった。また帰路には、ドバイに立ち寄って世界一の高層ビル「ブルジュ・ハリファ（160 階、828m）」でエレベータにのると 140 階ほどまで上ることができた。上からドバイの街を見下ろすと、砂漠の片隅にいくつもの高層ビルがによきによきと建っている光景をみることになった。

感想

アブダビ首長国は、石油資源のおかげで国際的にも非常にリッチな国になった。しかし石油は有限であり、長期のビジョンを持つことが重要であることを認識している。

石油がアブダビの GDP の 60% を占めているが、「2030 年の経済ビジョン」では、これを 40% に引き下げることを目標にしている。そのためには、再生可能エネルギーや先端技術を導入して、知識をベースにした経済活動を増大させようとしている。マスダールシテイの建設はそのひとつの活動である。産油国から「サステナビリティ経済」へのアプローチというコンセプトは、今までに接したことのないもので、新鮮な驚きであった。

そこで日本の未来をどうするのかという問題に跳ね返ってくる。それが私たちの問題なのだから。

2014 循環研セミナー

「ブータンのサステナビリティ事情」

講師：後藤 貴昌 氏（循環型社会研究会・理事）

「持続可能な地球社会の構築」を実現するために、経済を最重視したマネー資本主義社会から、経済・社会・環境のバランスを求めるサステナビリティ主義社会（筆者の造語）へのシフトが求められている。

私はサステナビリティ主義社会のモデル国として、中米のコスタリカを昨年視察訪問し、今年はブータンを視察訪問してきた。ブータンのビザの取得については様々な制約があるので、WWF（世界自然保護基金）ジャパンが主催するブータン南麓・奇跡の谷WWF会員ツアーに参加した。これは TraMCA（国境を越えたマナス保全地域）プロジェクト支援の一環として行われたツアーである。



出典：WWF ジャパン

支援の取り組みを行なっている。ブータンは標高7000メートルの高地から150メートルの山麓、高山から亜熱帯の森まで、多様な景観を持つこの森と山の国は、国土の実に半分以上が保護区に指定されている、世界屈指の「自然保護先進国」です。

しかし、南に隣接するインド側では年々開発が進んでいるほか、ブータンでも国境付近などでの密猟や違法伐採が発生。絶滅が心配されている、アジアを代表する野生動物たちにも危機が迫っている。WWFではこの国境地帯にある、特に自然の豊かな「奇跡の谷」ともいふべき地域に、ひとつつながりの広大な保護区を作る、新プロジェクトを開始した。

WWFでは、ブータンとインドの政府に協力を呼びかけ、国境地帯にある合計10の国立公園と野生生物保護区、森林保護区をつなげ、ひとつの大きな保護区にする試みに着手した。これを「TraMCA（Transboundary Manas Conservation Area＝国境を越えたマナス保全地域）プロジェクト」という。マナスとは、ブータンからインドを通り、大河ブラマプトラ川へ注ぐ、この地域のシンボルともいふべき、川の名前を指す。

WWFの「ブータン・TraMCAプロジェクト」について

ヒマラヤの東に位置する、森と山の国ブータン。この自然豊かな国で今、環境破壊が進みつつある。世界の宝であるヒマラヤの自然を、未来に引き継ぐため、WWFは国境を越えた自然保護と、

プロジェクトの持つ7つの可能性

1 国ごとに異なっていた方針や手法を統一し、保全活動の効果をアップ!

2 両国が連携した密猟や違法伐採の取り締まりを強化!

3 特に、トラの生息地拡大と密猟防止の取り組みを前進!



TRAMCA
プロジェクト

4 地域の経済と自立を支える、両国の国立公園を巡るエコツアーなどを実施!

5 川の流域の保全管理を、国境で分断せず実行できる!

6 森の消失を防いで、地球温暖化の影響も防止!

7 保護区の間をコリドー（緑の回廊）でつなぎ、野生生物の行動範囲を拡大!

出典：WWF ジャパン

ブータン南麓・奇跡の谷WWF会員ツアーの概要

このWWF会員ツアーは2月21日から3月2日までの10日間のツアーであった。

22日の夕刻にバンコク経由でブータンのパロ空港に到着し、首都のティンプーに移動し国獣ターキンを見学後、WWFブータンオフィスを訪問。WWFブータン代表の挨拶と TramCA プロジェクトの説明を受ける。その後WWFスタッフと一緒に夕食をとる。

23日マナス国立公園に向けて、専用バスでドチュラ峠（3100m）を超えてインド国境の街ゲレフで一泊。24日も専用バスで終日移動し、夕刻にマナス国立公園に到着。25日はマナス国立公園で飼育しているゾウ乗り体験し、ブータンの農業指導に貢献した西岡氏の旧宅を訪問し、マナス川をカヌーに乗りキャンプ場に戻る。夜はマナス国立公園のレンジャー達とキャンプファイヤーをして交流を行う。26日は専用バスで再度ゲレフに戻り、27日はオグロヅルの越冬地フォブジカに宿泊した。28日はフォブジカにあるオグロヅルの越冬地を見学し、オグロヅル保護についての説明や、保護活動に協力している地元住民との交流を行った。その後、古都プナカへ向かい、プナカ・ゾン（城壁兼寺院）を参拝し、ドチュラ峠を越えてティンプーに戻って来る。その夕刻にWWFスタッフと一緒に夕食懇親会を行った。3月1日にティンプー

からパロ空港に向かい、バンコク経由で2日に日本に到着した。

このツアーの日本からの参加者はWWFジャパンスタッフ1名、エコツアー専門会社社長1名、ブータンツアーディレクター1名、WWF会員14名の合計17名であった。ブータン国内の移動はすべて専用バスを使い、道路インフラが未整備の為に、移動には多大な時間と疲労を伴った。ただ、専用バスでの移動時間中にはブータンツアーディレクターからブータンの多くの情報を提供して頂いた。またWWFジャパンスタッフからは今回のエコツアーを通じた TramCA プロジェクト支援の詳細情報を、エコツアー専門会社社長からは自然保護とエコツアーとの連携を図る重要性について多くを学んだ。



サステナブル主義社会としてのブータンと幸福

ブータン第四代国王ジグメ・シンゲ・ワンチュクは1979年にGNP (Gross National Product) 国民総生産量よりGNH (Gross National Happiness) 国民総幸福量を重視するという宣言をおこなった。GNHは1. 心理的幸福、2. 健康、3. 教育、4. 文化、5. 環境、6. コミュニティー、7. 良い統治、8. 生活水準、9. 自分の時間の使い方の9つの構成要素がある。

GNPは、経済発展が物質的豊かさを優先する資本主義の思想が前提であるのに対して、GNHは、精神的豊かさを優先するサステナビリティ主義社会の思想が前提になっていると言えるのではないだろうか。「経済価値」「社会価値」「環境価値」の視点で見て、資本主義は「経済価値」を最優先する社会システムであり、サステナビリティ主義は「経済価値」「社会価値」「環境価値」のバランスを重視する社会制度とも言える。ブータン国王はブータンの近代化を進めるが、欧米化は進めないと明言していると現地で伺った。産業革命を契機に多くの欧米諸国が「経済価値」を優先した近代化を進めてきたことに対して、本来ブータンが重視してきた「社会価値」「環境価値」が希薄化し、ブータン固有の文化が喪失することを恐れている。

実際、WWFブータンに伺った際に「ブータンの近代化が国民総幸福の減少傾向になっていないか？」と私の質問に対してWWFブータン代表Dechen Dorji氏からは「その傾向は確かにある。」と回答された。同じ質問を機会あるたびに多くのブータン人に問いかけてみたが、その度に同様な回答が返ってきた。

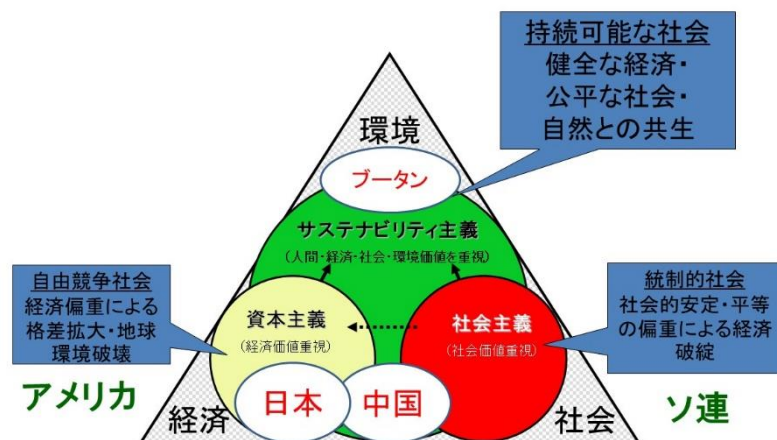
また今回お会いできなかったがブータン国立研究所所長である、Karma Ura氏はGNHについて次のように述べている。「経済成長率が高い国や医療が高度な国、消費や所得が多い国の人々は本当に幸せだろうか。先進国でうつ病に悩む人が多いのはなぜか。地球環境を破壊しながら成長を遂

げて、豊かな社会は訪れるのか。他者とのつながり、自由な時間、自然とのふれあいは人間が安心して暮らす中で欠かせない要素だ。金融危機の中、関心が一段と高まり、GNHの考えに基づく政策が欧米では浸透しつつある。GDPの巨大な幻想に気づく時が来ているのではないか。」

WWFブータンにインターンで勤務しているスイス人男性と夕食懇親会で話す機会があり、彼もGNHの思想に共感していて、「自然の中にいる時に最も幸せを感じ、死後は灰にしてばらまいてもらう事で自分が自然と一体になり多くの生命体に新たに自分が宿ることができることができる。」と熱く語っていた。

欧米的な資本主義社会の問題として、様々な価値をすべて貨幣的価値に換算する習性がある。しかしサステナビリティ主義社会は貨幣価値だけでは測定できない「人と人」、「人と社会」、「人と自然」との非貨幣的価値という尺度で地球社会の価値を考える必要があると思う。ブータンが今後近代化を進めてゆく上で、貨幣的価値への依存が高まり、非貨幣的価値の相対的低下をもたらし、そのことで幸福度の低下に繋がらないことを期待したい。

ブータンは持続可能（サステナブル）社会



2015 循環研セミナー

「英国のフィンドホーン・エコビレッジコミュニティの循環型のしくみと魅力」

講師：福島 由美子 氏（循環型社会研究会・理事）

イギリスの北部、スコットランドのハイランド州に、フィンドホーンという人口約千人の小さな村がある。この小さな村にあるザ・パークと呼ばれる敷地で「フィンドホーン財団」が運営するエコビレッジ・コミュニティには、世界から年に約70カ国、14000人の短期・長期の滞在ゲストが訪れる。ここは2012年に創立50周年を迎え、世界で今でも継続する最も古いエコビレッジ・コミュニティの一つである。私は、世界中のエコビレッジに関心の高い人々を引きつけるコミュニティの魅力を知りたい、そしてコミュニティが分断されず発展し継続してきた成功の秘訣を学びたいと思い、2014年夏に1ヶ月間のコミュニティ体験研修プログラムに参加した。このコミュニティの概要と循環型のしくみについて紹介する。



このコミュニティは、失業し路頭に迷いこの地にたどり着いた3人の盟友と家族が住みついた一軒のトレーラー・ハウスから始まった。彼らは野菜作りには適さない海岸近くの砂の多い土壌でオーガニックの畑作りを始め、スピリチュアルな手法で巨大な野菜を育てた、ということで世界に知られるようになった。今では約12haの敷地に、約130人の住人と、ゲストなどの滞在者を含め、

約300人～500人が暮らしている。財団はフィンドホーン・カレッジを運営し、年間を通して自己啓発、ホリスティック、英語、コミュニティ体験プログラムなど様々な教育研修やセミナーなどを提供し、世界で先駆的なエココミュニティ創造、実践の場となっている。また、国連から正式に認可されているNGO団体として、エコビレッジを学ぶ専門家のトレーニングセンターとしての役割も果たしている。Wikipediaによると、このエリアで少なくとも40以上のコミュニティ・ビジネスと300の仕事を用意し、スコットランドのハイランド地方で年500万ポンド（10億円近く）の経済的インパクトを与えているとのことだ。

人間活動が環境に与える負荷を表す指標のひとつであるエコロジカル・フットプリントは、2007年4月のフィンドホーン財団のプレスリリースによると、コミュニティ内の数値は2.56ghaで、イギリス国内5.4ghaの半分に抑えられている。ビーチに近い大自然あふれるザ・パーク敷地内では、太陽光や風力、バイオマスなどの自然エネルギーが使われ、生活排水をバイオの力で処理し、エコ建築や地域通貨、カーシェア、無農薬有機栽培の畑など、循環型社会のモデルとも言えるしくみを滞在プログラムでの生活を通し、“実体験”をすることができる。

大自然に囲まれた敷地内の施設としては、ゲストが滞在するゲストハウスや研修施設のほか、コミュニティ・センターと呼ばれゲストや住人の交流の場となるオーガニックの食堂もある施設や、

食品や土産物を扱うフェニックス・ショップ、コンサート・シンポジウム・大勢でのミーティング・ダンスイベントなどに使われるユニバーサル・ホール、住人やゲストの憩いの場となるブルー・カフェ、無農薬無化学肥料で営まれる農園、住人の居住区、風車やバイオマスのエネルギー発電施設、サンクチュアリと呼ばれる祈りの施設、財団や他のNGO等のオフィスなどがある。

滞在者の多くは、昼食と夕食が用意される食堂の料理、オーガニック農園、各住居のメンテナンスの大きく3つのチームのいずれかに入って仕事をする。プログラムに参加し、一定期間自己負担をしてゲストとして働き、財団に認められた場合には、ここで有償スタッフとして働くことができるしくみになっている。(住み込みで約200ポンド、敷地外居住者で約800ポンド。一部は後述する地域通貨”Eko”で支払われる。)



まず一つ目に、食や有機物の循環について。このオーガニック農園で作られた野菜は、食堂で

提供される。食堂はバイキング方式で、卵は出すが、基本的に肉・魚は出ない。ただし、施設内のショップで肉を購入し、自分で調理をしたり、外食のために外出したりすることは自由で拘束はされない。ここで食事をするためには事前に利用申請が必要で、過不足がないように量を調節されている。施設内の農園の野菜だけで足りない分は、地産地消で地元のオーガニック農園から購入している。食堂で出た食品残さは、堆肥にされ畑に戻される。農園の近くには、おがくずの分解力を利用した無臭のコンポストトイレがある。

2つ目に、エネルギーの循環について。ここには4基の大型風車があり、約800kWの発電能力がある発電所が運営されている。この電力の約50%は敷地内の施設に送られ、残りは敷地外の送電線に送られ売電されている。天候に恵まれた日には、敷地の100%の電力を賄うことができる。フィンドホーンは北緯57度付近に位置し、私が訪れた9月でも朝夕や雨の日は冷え込む日が多かった。ここでの室内暖房やシャワーに使われる温水と温熱は、バイオマス発電で熱され、ボイラーを通して各施設や住居に送られている。バイオマス発電の燃料のウッドチップも地産地消で、隣のフォレスという街で製造されている。施設内の多くの建物の屋根は、植物が育つグリーンルーフやソーラーパネルが設置されている。



3つ目に、水の循環について。敷地内の台所や風呂・トイレから排出される生活排水は、リビング・

マシーンと呼ばれる浄水システムで処理される。下水の浄化の段階によって異なる植物を使い、植物の根に繁殖するバクテリアなどの微生物が汚水の処理を行っている。このシステムは、1日最大500人分3トンの下水を浄化することができる。微生物の働きを阻害しないように、施設内で使用するあらゆる洗剤は、全て「**BIO**」や「**ECO**」と表示された生物分解できる環境にやさしい洗剤に限られており、ゲストには無料で提供されている。



4つ目に、物の循環について。施設内には、樽で使用されていた木を再利用したエコハウスや、石を積み上げて建てられた建物がある。また「ブティック」と呼ばれる無人の小屋には、ゲストや住人が不要になった衣服や靴、子どものおもちゃや本などが整頓されて置かれており、無料で誰でも物を持ち込んだり持ち帰ったりすることができる。住人や長期滞在者の間でカーシェアも行われている。約50人で6、7台の車を共有し、月極の基本料金と使用時間・使用距離に応じて運営されている。

5つ目に、人の循環について。ここにはスタッフや短期、中期、長期の研修滞在者の他に、スタッフや住人、アフェリエイト・ビジネスに関わる人、コンサートなどのイベントや施設の見学で訪れたビジター、近隣の住人など、さまざまな属性の人たちがいる。国籍は、私が話しただけでも、イギリス人以外に、ブラジル・ドイツ・フランス・イタリア・ポーランド・アメリカ・スロベニア・イスラエ

ル・インド・タイなどさまざま。また職業も、医者・助産師・歯医者・水泳やヨガのインストラクター・国家公務員・弁護士・会社員・リタイアした人・ジャーナリスト・活動家・建築家・学生・別のエコビレッジのスタッフ・ライターなどさまざま。さまざまな人々がここで交流し、それぞれがここでの体験を自分の国に持ち帰り、自分の暮らしの中で新しいステップを踏み出そうとしている。最後に、お金の循環について。2001年に地域コミュニティ事業を支援する基金「**Ekopia**」が設立され、2002年より、「**Eko**」と呼ばれる地域通貨を発行し、運用が始まっている。1Eko=1ポンドとして換算し、敷地内のカフェやショップの他、敷地外の村のパブで使える店もある。**Eko**には使用期限がある。現在は約250人のメンバーが出資し、約100万ポンド（約2億円）の資金が運用されている。風車の新設やショップ運営などのプロジェクトや有償スタッフの給与の一部を**Eko**で運用することによって、コミュニティ運営や拡大を低コスト・低利子で運用することができ、ローカルビジネスの活性化と雇用創出にもつながっている。



以上、循環型のしくみについて簡単に紹介したが、ここでの1ヶ月の体験を通して一番私が学んだものは、上記に述べたしくみの素晴らしさもさることながら、それ以上に、平和で持続可能な社会を創ろうとしている人たちが世界中にいることを知り、友人になり、平和で循環型のコミュニティで暮らす醍醐味を肌で感じられたことかもしれない。今後は、少しでも自分自身が実践者となるように、日々の暮らしをシフトしていきたいと思っている。

(参考資料)

FindhornFoundationHP:

<http://www.findhorn.org>

Ekopia Resource Exchange Ltd HP :

<http://www.ekopia.org.uk>

<http://www.ekopia.org.uk>

2015 循環研特別セミナー

「企業情報の開示に第三の波が到来—CSR 特別セミナーより—」

講師：山口 民雄 氏（循環型社会研究会・理事・代表）

毎年、約 350 社の非財務情報の主要な媒体である CSR 報告書や最近急増してきた統合報告書を点検しているが、この 1~2 年、情報の開示姿勢、内容に対する強い社会的要請に答えようとする意欲が伝わる報告書が出現している。この社会的要請は、国内というよりもグローバルな要請で、グローバル展開を志向する企業ほど敏感にとらえて対応しているようだ。この社会的要請は、1990 年代以降の非財務情報開示の流れから見ると、“第三の波”といえよう。なお、第一の波は 1996 年～、第二の波は 2000 年～である（詳細は略）。

第三の波の象徴例は、EU において、企業の非財務情報に関する指令が 2014 年 9 月に欧州連合理事会に承認されたことだ。この指令によって、従業員 500 名以上の EU 域内企業約 6,000 社は、マネジメントレポート（CSR 報告書等でも良いとしている）において非財務情報を開示することが義務付けられ、開示しない場合は開示しない理由の説明が求められる。そして、開示に必要な最低限の内容を示し、それぞれ方針、活動実績、主要なリスク、主要業績指標（KPI）、デュー・デリジェンス・プロセスを開示することになっている。

価値創造についてのコミュニケーションへ

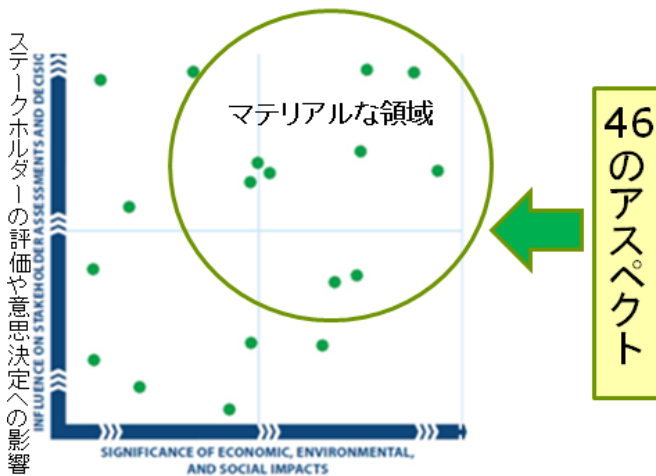
第三の波は 2010 年の ISO26000 の発行から今日まで一連の波が押し寄せてきている。ISO26000 は情報開示のガイドラインではないが、グローバルなソフトローを尊重する企業では CSR 活動だけでなく、情報開示に際しても本規格を参考にしている。2014 年版の報告書においても 340 社中約 3 分の 1 が同規格を参考ガイドラインの一つとし

てあげている。

本規格では「社会的責任に関する情報の特性」として以下の 7 点をあげている。すなわち、「完全である」「理解しやすい」「敏感である」「正確である」「バランスが取れている」「時宜を得ている」「入手可能である」などである。アンケートで報告書が読まれない理由を聞くと「都合のよいことばかり書いてある、知りたい情報が少ない」ことがしばしば指摘される。そのため、この 7 点のうち、特に「敏感である」（情報は、ステークホルダーの関心に敏感であるべきである）と「バランスが取れている」（情報は、バランスが取れ、公正であるべきである。また、組織の活動の影響に関する否定的な情報を省くべきでない）が特に重要である。

2013 年には GRI の第 4 版、IIRC（国際統合報告審議会）による統合報告のフレームワークが公表された。前者の主要な改訂点としてはマテリアリティ（重要性）原則が強化されたことである。マテリアリティは第 3 版においても強調されていたが、ガイドライン準拠のアプリケーションレベルがどれだけ多くの項目を開示するかによって決まることから事実上、マテリアリティの選択に誘導できなかった。第 4 版では、予め 46 の側面（Aspect）が取り上げられ、その中から企業はマテリアリティを選定することになっている。このことにより、選定方法が標準化され、情報開示のマテリアリティ選定が進むことが期待される。マテリアリティ原則が遵守されることにより、組織と報告書の利用者はサステナビリティに多大な影響を与えるマテリアルな側面に集中することで、報告書がより

戦略的でフォーカスされ、信頼性が高まり有用なものへとなる。



組織の経済・環境・社会影響の著しさ

図1 【G4のマテリアリティの選択】

後者のフレームワークでは統合報告をさまざま定義しているが、その軸は「企業がどのように短期、中長期にわたり価値を創造し、維持するかを伝えるもの」であろう。従来の過去の取り組み、パフォーマンスを開示していた報告書とは次元が異なる。そのため、価値創造プロセスとビジネスモデルが特に重要となる。

IIRCは「我々は、企業報告の次なる発展は、価値創造についてのコミュニケーションにあると考える」と断言している。そして、フレームワークでは価値創造プロセスとして以下の通称オクトパス・モデルを示している。この図は以下のように解釈できるであろう。

組織は経済状況や技術革新等の外部環境の中で存在している。組織の目的や意図を明確かつ簡潔に表したものが使命とビジョンである。外部環境を継続的にモニタリング、分析することによって、リスクと機会が特定される。そして、機会をどのように最大化し、リスクをどのように最小化する

かが戦略であり、戦略は資源配分を通じて実施される。プロセスの中核に位置するビジネスモデルには、組織と社会が所有する6つの資本がさまざまな形態でインプットされ、事業活動を通じてさまざまな形でアウトプットされる。アウトプットはさまざまな種類の資本に影響を与えるアウトカムとなる。組織は意思決定を行うための実績を確認し、将来の見通しを定める。このプロセスは静的なものではなく、資本は影響を受け再度インプットされていく。このサイクルを報告するのが統合報告である。

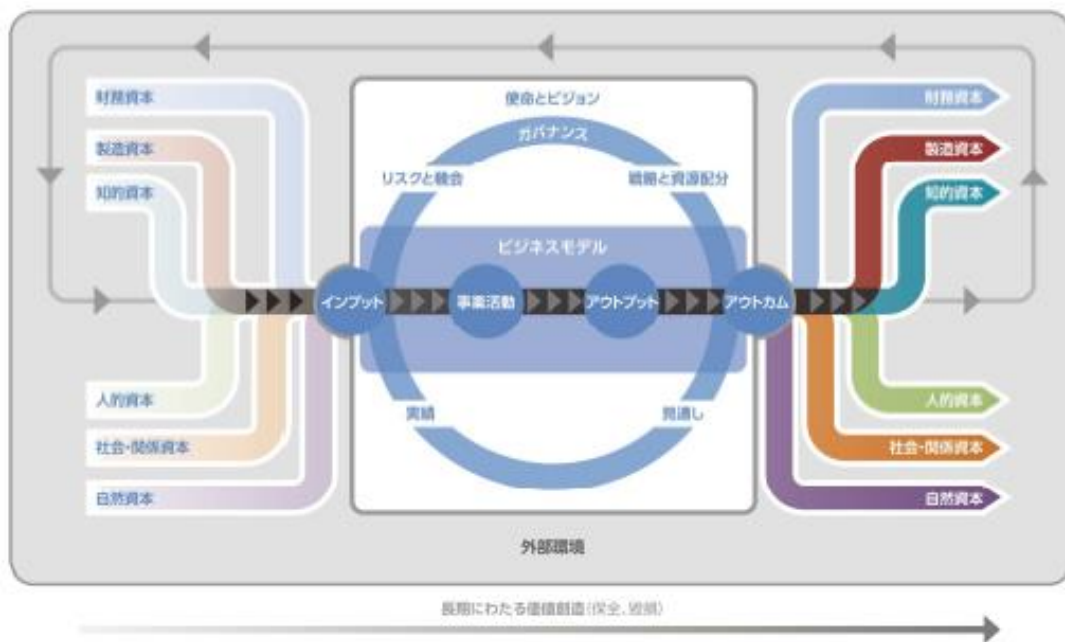


図2【価値創造プロセス】

価値創造プロセスではビジネスモデルが中核となる。ここでいうビジネスモデルとは、さまざまな資本をインプットし、事業活動を通じてアウトプットに変換し、アウトカムをもたらす組織が選択したシステムである。

アウトカムについて、フレームワークでは「組織の事業活動とアウトプットの結果としてもたらされる資本の内部的及び外部的影響（正と負の両面について）である」と定義している。内部的なアウトカムは、従業員のモラルや組織の評判、収益及びキャッシュフロー等を指し、外部的なアウトカムは、顧客満足度、納税、ブランドロイヤリティ、社会及び環境的影響等を指す。

従来の報告書ではこのアウトカムの記載が決定的に弱かった。新たなさまざまな資本を投入し、新製品・サービスを市場に投入しても、そのアウトカムは財務資本に関する記述に留まっている。新製品がユーザーの意識や行動をどう変化させたか、さらに社会的なインパクト（正と負）、グローバルな広がりなどのアウトカムが重要な報告になってきている。

こうしたグローバルな波とともに国内でも企業

の情報開示に大きな影響を与える波が押し寄せた。それらは成長戦略を定める「日本再興戦略」の中から誕生したもので、いずれも企業と機関投資家の望ましい姿を示している。それらは、「責任ある機関投資家」の諸原則《日本版スチュワードシップ・コード》（2014年2月）、伊藤レポート（同年8月）、コーポレートガバナンス・コード（2015年3月）である。（詳細は略）

企業情報開示は継続的改善から飛躍的改善が要請されている

企業と投資家をはじめとするステークホルダーとのコミュニケーションに関する第三の波を俯瞰すると、「透明性と有用性の向上」の波といえよう。企業の真の姿を伝えるために非財務情報、正負両面の情報、過去だけでなく将来に向けた情報の開示が求められている。そして、企業には、ひな形的な記述や具体性を欠く記述をさげ、正確で利用者にとって分かりやすく、情報として有用性が高いものになることを強く求めている。今一度、これらの波の震源一つひとつを確認し、自社の報告書が要請に対応しているか点検すべきである。継続

的改善は必要であるが、今は飛躍的改善の時である。

こうした状況にもかかわらず、残念な「決断」がある。大事故や不祥事発生企業の報告書の発行中止である。東京電力は原発事故を起こした2011年以降、サステナビリティレポートを発行していない。大量の顧客情報が漏えいしたベネッセホールディングスは統合報告書の発行をしていない。慰安婦や福島原発事故・吉田調書の誤報を認めた朝日新聞社はCSR報告書を発行していない。CSRは不祥事、大事故発生時にその真価が問われる。マスコミを通じて断片的にさまざまな対応が伝わってくるが、自らが一連の取り組み、将来にわたる再発防止への決意を報告することがCSRとして最も重要である。そして、その報告の最適な媒体が年次報告書ではないだろうか。農薬混入事件のあったマルハニチロでは「CSR報告書2014 特別版」:「アクリフーズ農薬混入事件」の記録(42頁)を発行している。発行に当たって同社では「事件の経緯や反省点、今後の対策をステークホルダーの皆さまにご報告することが、(中略)責任を果たすことにつながり、信頼回復の第一歩とすることができる」と明言している。

「春夏秋冬」

既に桜が散ってしまったのに寒の戻りが続く。最近、お天道様は我々を裏切る。天災もしかり、天気はもう滅茶苦茶だ。これも人間社会の文明の成せる仕業なのか。もう百年以上も前の漱石先生に聴く。曰く「文明はあらゆる限りの手段を尽くして、個性を発達せしめたる後、あらゆる限りの方法によってこの個性を踏みつけようとする」と。更に「鉄柵の中で自由を与えて、これより先は一步も外へは出てはならないと脅すのが現今の文明である」と続ける。そして、その文明の象徴として汽車を挙げ、汽車ほど個性を軽蔑したものはない。あぶない、あぶない、と。漱石先生の文明論は、百年以上もたった今、お天道様までも怒らすことを予知しているようだ。

私は現代の文明の象徴は、まさにスマホではないかと思う。手に乗る四角い箱の中に無限の自由があると勘違いをしている。ゲームをする、あらゆる知識を知る、世界の人と会話することが出来る。しかし、快樂を得て、物知りになり、いろいろな人とつながっている、ただそんな気がしているだけだ。現実には隣の人との会話さえも苦手で、そのためにスマホに頼る人もいるという。電車でスマホをじっと見ている人たちが、皆同じ顔に見えてくる。お天道様は更にお怒りになるだろう。あぶない、あぶない。

今はただ、春は春らしく、夏は夏らしくと、お天道様に祈るしかない。そうしなければ春夏秋冬はなくなってしまう。

山吹や荒ぶる鍾馗の目に涙 風月 (M)



歌川国芳画『鍾馗』 Wikipedia より